



令和 6 年度 東京都すくわくプログラム推進事業

「持続可能な社会に向けた取り組み」 を視野に入れた探究的な活動



学校法人けやきの杜小平神明こども園

テーマ設定の背景

私たち小平神明幼稚園の60年間の教育活動は、常に自然と共に歩んでまいりました。子どもたちにとって一番の教材は自然です。これからも、たくさんの自然に囲まれて私たちは保育を行っていきます。自然が大切であるという認識は一人一人が持っている反面、自然があることが当たり前になっており、自然との共存を強く試行してこなかった現実があります。

私たちは、令和6年より認定こども園に移行しました。それにとまって、園舎の建て替え事業を行いました。建て替え事業のなかでも多くの資源を消費しました。全てのものを再利用することはできません。しかし、少しでも持続可能な社会に向けて、私たちが出来ることはないかと考え、東京都すくわくプログラムのテーマを「持続可能な社会に向けた取り組み」に設定するに至りました。

改めて持続可能な社会に向けた社会について考えていく中で、当初考えていた「自然を大切にする」という視点だけではなく、「地域とのつながりをどのように深めていくか」「子どもたちが主体的に社会に参画していくこと」「生物多様の視点と人間関係」など視点が派生していきました。当初立てていた計画よりも、内容に広がりがあったことは、本年の成果であるとともに、次年度にも継続して繋げていきたいと考えています。

また、子どもたちの学びを支える保育者の保育の視点を持て行くためにも「職員の持続可能な社会に向けた」視点の資質・向上についても研修にて考え合う時間を持つことも本事業の中核と考えています。今回導入したiphone、ipadを使用して保育の記録や、子どもたちとの取り組みに対する振り返りも、子どもの学びを継続的に支えていく要因へとつなげていくことを考えています。以上が、「持続可能な社会に向けた取り組み」をテーマにした背景です。

プログラム内容

01

ウサギの飼育環境
から、生物多様、
生態等について考
える

02

畑の整備から、循
環社会の構造を考
える

03

社会環境に参画す
る（キックボード
作りを起点とし
て）

04

味噌づくりを通し
て、生産者とのつ
ながりを考える

1、ウサギの飼育環境から生物多様、生態について考える（月頃）

“ウサギ”ってどんなどうぶつ？

幼稚園で長年飼育している「ウサギ」。時々保育室の中で放し子どもたちと触れ合う体験はしてきたものの、ウサギが土を掘ったり、跳ねたり、思い切り走ったりする姿を見るような飼育環境がありませんでした。そんなとき、臨時に設置したサークルの中を嬉しくて興奮したのか、俊敏に走るウサギの姿が。それを見た子が「ウサギがはしった!!」と言い、驚いた様子がありました。そんな些細な出来事が、大人は当たり前と思っていることも、子ども達にとっては新鮮で、新しい発見がたくさんあるのだと改めて考えてみるきっかけとなり、園では子ども達に「ウサギがウサギらしく過ごす姿を間近で見てほしい」と願いを持ち、飼育環境を造ることになりました

①



まずはウサギがある程度走れる広さのスペースを確保し、整地から始めます。保育者が大きなスコップをもって地面を掘り出すと、子ども達が「なにやってるのー？」と集まってきました。「ウサギの広場作ってるんだよ、一緒にやる？」「やるー!!!」「ぼくも!」砂場からスコップを持ち出し、続々と子ども達が力を出してくれます。たくさんの子どもの協力のによってあっという間に整地され、ウサギと子ども達が共に遊べる場の環境づくりがスタートしました

②

作り進めていると、ある年長さんから「小屋とか隠れるところ作った方があった方がいい」とアイデアがありました。「じゃあどんな小屋にしたいかまず紙に描いてみる？」と“設計図”づくり。こんな形のいいな、ここを入口ね、など思い描いたイメージを紙に描いていきます。

途中脱線したり、別のこと始めたりしましたが、きっと頭の中には完成図のイメージがあったことでしょうね。この“小屋づくり”は着工半ば。年長さんが卒園するまでには完成したいと思います。



③



設計図を描いた子を中心にしながら今度はどのくらいの大きさ、高さが良いのかを実際の場所を見ながら決めていきます。メジャーを伸ばして「これくらいかな」「これだと長すぎだね」など数字と実際の長さを合わせながら進めていました。仲間とひざを突き合わせて考えたり、「そっち持ってて」など声を掛け合いながら進めていく頼もしい年長さんの姿がありました。

④



ひとまず“うさぎと人が一緒に過ごせる場”が完成しました！穴を掘ったり、走ったり、リラックスするウサギを間近で見て、触れたりエサをあげたりしながらウサギとの距離がうんと近くなりました。お気に入りのウサギを連れてきて遊ぶ子、登園後自分の調子が出るまでウサギを見ながら気持ちを整えている様子の子・・・。一人一人ウサギに対する意識に違いがあると思いますが、この空間でゆっくり過ごしながらウサギへの関心が高まってくれたらと願います。

2、畑の整備から、 循環社会の構造を考える

今年度は、畑の枠を作り、土壌改良に取り組みました。

土壌改良には、給食等ででた調理の食材の残りを土の中に混ぜ込んだり、焚火コーナーででた灰を定期的に混ぜることで土壌改良に取り組んできました。

また、木枠の制作や土の小石拾いなど、畑を始めるにあたっての基礎作りも子どもたちと一緒に取り組んだ。

この取り組みの背景には、春に年長組が野菜を育てた際にキュウリが病気になり解決方法を求めた際にバスの先生か教えてもらった「りん（リン）・さん（酸）・ちっそ（窒素）・カリ（カルシウム）」が必要であることに起因している。

「はたけが できたら きゅうり そだてようね」

「とうもろこし が いいな」

と栽培に対して期待を膨らませる子どもたちの姿が見られた。



3、社会環境に参画する（キックボード作りを起点として）

『ぼくたちのもの』 ～キックボード作り～

【11月14日(木)】

朝の遊びの時間に、Rくんが「いつになったらキックボード（ボールを蹴って当てるもの）作ってくれるの？」と岳先生の所へ行ったようです。

前から、サッカー好きな男の子たちのために、キックボードが欲しい！と私が岳先生に話していたのを聞いていたようでした。そこで、「よし、今つくろう！」とキックボード作りが開始されます。この日は、枠組みとなる木材を切ったりの作業がされました。

お昼頃から園外へ出る岳先生に“大人が作ってあげるんじゃなくて、自分たちで作るんだよ、『ぼくたちの』キックボードなんだから、”とされたことから、設計図を書きました。



【11月15日(金)】

9時にしっかりと集合場所へ行った3人。この日はまず、木材の保護塗料を塗りました。岳先生に、この塗り方で何年使えるかが決まるんだと言われ、丁寧に丁寧に...

その後は、電動工具を使って支えを組み立てていきました。

簡単なものではありませんが、感覚で上手くいく方法をつかんでいました。

1本ネジを入れると「けっこうつかれた...」と、興味や意欲だけではなく、しっかりと緊張感も感じているようでした。

また、苦戦している姿に対して、そっと手を差し伸べたり、上手な子に「プロじゃん！」と認めたり...仲間と支え合う経験も。

この日だけでも、

- ・誰かと時間になって待ち合わせすること
- ・物の扱い方
- ・丁寧に取り組むことの大切さ
- ・仲間との関わり

など、生活の中にもリンクしていく必要な学びが沢山。

このような過程が“自分で、”“自分が、”そして、『ぼくたちの』に繋がることを感じました。



【11月18日(月)】

支える人とビスを打つ人に分担して協力しあったり、時には鳩を追いかけて脱線したり、それを「こっちやるんじゃないの?!」と戻したり(笑)大人も入りながら着々と進めていき、支えも完成!!立てて、ボールを蹴って当てられるまでになりました!

“難しいことも出来るんだ!”という自信、“ちょっと背伸びしたことをやってみたい挑戦欲”、“出来た先の達成感を知ってるからこそ、その気持ちを味わいたい”、そんな年長児らしさに感心しました。

作業をしていると、年少中の子どもたちも様子を見にきます。

「ぼくもやりたい」と言った年少さんに、岳先生が「これはさすがに年長さんしか出来ないな、年長さんになったら出来るよ」と。

そんな言葉を聞いて、なんだか自分たちが大きく認められてるようでとても嬉しそうな表情の子どもたち。そして、出来上がるとすぐに駆け付けてボールを蹴ったのは、作業を連日見ていた年中組の数名。自分たちも、早くボールが思い切り蹴りたくて作業を進めていましたが、先に蹴らせてあげて、後ろで見守り

「みんなが喜ぶものになってよかったね」とのつぶやき。・・・素敵ですね。

『ぼくたちのもの』は、『ようちえんみんなのもの』にもなりました。



【11月22日(金)】

やっと晴れたこの日!

しっかり待ち合わせの9時を意識して、集まった子どもたち。

まずはキックボードを綺麗に拭くところから始まりました。

そこから、設計図をもとに、まずは油性マジックで下書きしていきます。

少しドキドキしながらも、設計図を見ながら書いていきました。

こんなに大きな面に描くことはなかなかないので、面に対してどの大きさに描いていったら良いのかは、担任もアドバイスをしながら、慎重に。

その後、ペンキで塗っていきました。

設計図通り、高い点数は丸が小さくて、色が赤。

低い点数は丸が大きくて色は青。

小さい方が難しいということや、なんとなくプラスマイナスの色のイメージが生活の中から培われているのだなと感じました。

あとは、乾いたところに数字を描くのみで完成です!



【12月4日(水)】

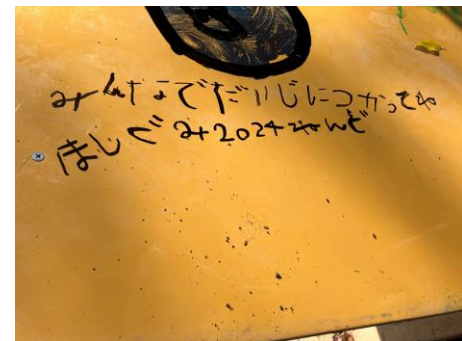
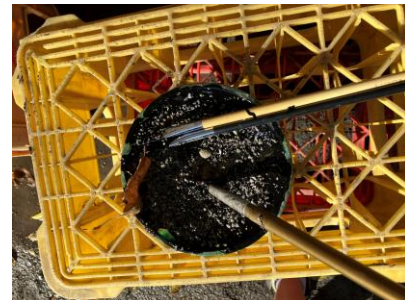
11月26日に塗った色が乾いたところへ数字を書き入れてから、そのままになっていたキックボード。担任から、「そろそろキックボード完成させたいよね」と登園してきた子どもたちに投げかけました。Rくん・Sくんは「岳先生探してくる!」と走っていきました。岳先生から「黒のペンキ持ってきたよ」とお知らせがあったことから、担任と3人で得点を書いていきます。Sくん「ここは何点にしような...」と青の丸に書く点数を悩んでいると、見ていたRくんが「104点は?!」と。Sくん「えーでも得点が高すぎる、青だし」Rくん「うん、もう少し低い方が良さね、100点とか?」Sくん「でもここが2点で、それよりも丸は大きいから...0点にするわ!」と、大きさからの数の概念や色のイメージなどにもこだわりを持って作り上げていっていました。

もう完成だ...!!というところで、年少組の男の子が突然来て、、置いてあった黒い筆を手にし、わしゃわしゃーとボードに描き、筆をポイっとし、ペンキを入れていたお皿に砂をジャーーー。そして、瞬く間に去っていきました。

3人で唖然としたあとに... (保育者は、追いかけて話をしに行くか迷っていると...)

Rくん「俺も年少の時、ダメダメだったんだよな〜」
Sくん「うん、しゅんも。絵も嫌いだった」
Rくん「うん、ご飯もあんまり食べれなかった」
Sくん「年少の時はみんなダメダメなんだよな」

と笑って言いました。その2人の姿に、本当に感心しました。自分たちで大切に、コツコツと作ってきたもので思い入れも強いはずですが、でもそれと同じくらいに、年下の子の姿に過去の自分を照らし合わせて共感する姿に、心を打たれました。そして私も、子どもたちと同じように、今回は教育者としての立場ではなく仲間として、うん、私もそんな時あったわ!と一緒に笑い合いました。大変なことが起こったけれど、なんだかホッとした時間に、保育ってドラマだな〜と思いました。そして最後に書き入れた文字は・・・『みんなで だいじに つかってね』



【12月5日(木)】

昨日のペンキが乾き、いよいよ完成です！岳先生から、完成した除幕式をやろうと提案してくれました。

（そして用意されたのが、サイズも合わないペラッペラな布...というのが、岳先生らしい...いや、神明らしいです。笑）

9:30ごろ、園庭で遊んでいる子たちに声を掛け、除幕...ついにキックボードが完成です！！

そして、理事長先生から主に頑張った3人個人へと、入れ替わりで取り組んでいたほしぐみのクラスへと、“感謝状、が贈られました。照れ臭さと共に、なんだか誇らしげな表情でした。

みんなの「3.2.1...」の掛け声と共に3人がボールを蹴ると、おー！っと歓声があがりました！！

そんなこんなで、約3週間に渡るプロジェクトがひとまず完結されたのでした。

すぐにボールを蹴ったり投げたりする年中組さん。

「俺たちはドッチボールでもするかぁー！」と走っていく背中がとても頼もしかったです。

みんなの前では恥ずかしさもあったようで、3人と担任になると、Rくん「俺、神明幼稚園に入ってこんなに褒められたの初めてだあああ！誕生日会よりも嬉しい！！」と満面の笑み！心の底からの喜びの表現に、私も一緒にとても嬉しい気持ちになりました！



【キックボード作りを通して・・・】

最初は、“思い切り蹴る場所がない、”という不自由さから始まったこの取り組み。

自分たちのために作っていたはずのものが、いつの間にか“幼稚園みんなのために、”という気持ちになっていました。

完成までの過程の中で、普段使わないペンキやインパクトドライバーに挑戦したり、人と協力することの大切さを感じたり、目的を持って取り組んでいくことの面白さを感じたり、技術面でも心の面でもたくさんの動きがありました。

自分たちで不自由さをなくすために計画を立てて、実行し、達成に向けて諦めずに最後まで取り組むことの面白さ。そして、誰かに喜んでもらえたり褒めてもらえたりすることの喜びや達成感・満足感を感じることが出来たと思います。

椅子に座って大人に何かを教わることでは経験できない学びが、今回の出来事で大きな経験と自信、学びになっていたのではないかなと感じました。

幼児期にとって本来必要な、大切な“学び、”とはこのようなことなのではないかなと改めて感じた取り組みでした。

4、味噌づくりを通して、 生産者とのつながりを考える

当日の流れ

こどもたちとお味噌づくり

※作り置きはすぐ腐り、製成中の味噌は冷蔵庫に立ててしまうこともあるので、当日は納豆を食べずに済みます。

材料

米麹
麦麹
塩
大豆

道具

大鍋
大きなボウル
ビニール袋（布袋でも◎）



作り方

1 大豆をしっかりと（15時間～18時間）浸水する。

2



2 大豆を芯がなくなるまで煮る。煮汁は捨てない。

3



3 大豆をつぶす。袋に入れて潰すと潰しやすい。

4 40度くらいに冷ました大豆を、塩切りした麹によく混ぜる。

4



5 ソフトボール大に丸めてから、容器にみっちり詰め、ていく。



6 表面にカビどめ処理をして重しをする。



☆ 4ヶ月程熟成させたものは若味噌として食べられます。1月頃仕込み→夏を越えたあたりのものは旨味が増します。若味噌をとってまた蓋をして、熟成させたものをまた食べて...と少しずつ食べきるまで色んな熟成度合いを楽しめます。

5

今回使用する麹は、静岡県清水町にある「中村屋麹店」の米と麦麹。中村屋麹店は127年続く歴史ある麹屋さん。

蒸したお米に「麹」という粉の胞子をくっつけて麹菌＝カビをはやしてやる。つまり米麹や麦麹はかびたお米・かびた麦...ということ。

世の中のかびのほとんどは身体に悪いものをつくりだしてしまうけれど、米麹や麦麹のかびは「アスペルギルス・オリゼー」といって毒をつくらぬ種類であり、国の菌としても指定されている。

お味噌をはじめ甘酒や日本酒、みりんや醤油も麹菌のおかげで作ることができ、みんなの普段の食卓をこっそり変えている。



今回使用する中村屋麹店の米麹（白色）と麦麹（茶色）



麹を拡大して見てみるとこんな小さな世界が見える

当日の様子

今年度の小平神明こども園のテーマの一つに「持続可能な社会に向けた取り組み」があります。「食」「生物多様」「地域との関り」「文化的な営みの継承」など、「持続可能な社会に向けた取り組み」にも様々なアプローチがあります。その中でも、「食」に関する事柄は、子どもたちにも内容が伝わりやすく意識しやすい要素の一つだと考えています。今回の味噌づくりでは、年中組の保護者Mさんが、発酵食品などにとっても詳しいことから企画されましたが、生産者の方の事もわかるように資料も作成してくださり、より素材を身近に感じることが出来るようにご配慮いただきました。

味噌づくり前日

一昨日は、Mさんのお家でお豆を15時間以上、水に浸していただきました。

そして、昨日はこども園へと来ていただき、5時間ほどお豆を煮ていただきました。「お豆を煮るときに豆から泡が出る様子が面白い」と教えていただき、豆から泡が出る様子をもも組の子どもたちと一緒に観察をしました。泡を見て子どもたちは「おいしそう!」「フワフワしてるー!」と大喜び。出てきた泡はお味噌の味を落としてしまう為、Mさんがすくっていきます。

子「なんで あわ とっちゃうの」

Mさん「泡がはいってると、お味噌がおいしくなくなっちゃうんだって」

子「たべられないの?」

Mさん「この泡もね、栄養がいっぱい入ってるんだって」

子「えー えいようが あるのに あわ とっちゃうの?あわが はいったら どんな あじが するんだろう」

子ども達が、具体的に目の前の味噌の変化を見たからこそ感じたことだと思います。

味噌づくり当日

全学年が遊びの時間に入り混じりながら、お味噌づくりを行いました。

柔らかくしたお豆を、みんなで協力してつぶしていきます。みんなでつぶしていくのであっという間にペースト状になりました。

年長組のY君が、「まだ、ねんしょうさん あまり やってないから やらせてあげよう」と優しく年少さんに作業を促している姿があり、他学年が混ざり合いながらの作業の良さを感じた場面でした。

色々なお豆の種類の見比べコーナーも保護者のMさんが設定してくだしました。

保護者のMさんが、拡大鏡を使用して、麴の菌糸もプロジェクターに投影して見せてくださいました。「塩が混ざると、塩に殺菌する力があるから菌は死んじゃうんだけど、これから酵素になって、発酵していくんだって」少し難しい話もありましたが、子どもたちは真剣に話に耳を傾ける様子がありました。

豆がペースト状になった後は、麴と塩をよく混ぜ、その後、お豆と麴、塩を素手で混ぜ込んでいきます。こねるような状態になります。少し口に入れてみると、少し淡泊ではありますが、味噌のような味がします。

最後に空気が入らないように、珪藻にぎゅぎゅっと詰め込んで、お塩で殺菌をして蓋をしました。この味噌が完成するのに3カ月ほどかかるということで、完成は4月以降ですが、今年度の年長さんが食べられるように3月の末に味見をしてみたいと思います。完成が楽しみです!



結果考察

取り組みを通して学んだこと、今後の課題について以下に記述していく。

学び

- ・SDG sという言葉は知っていても、具体的な内容等については知らない職員も多く、生活の中で少し意識するだけで、子どもたちと地球にやさしい生活を創っていくことができることを感じた。
- ・生き物が生き物らしく暮らす場を整備したことにより、生き物の動きがより身近になり情緒の安定及び、より心地よく一緒に暮らすための工夫がみられるようになった。
- ・畑の取り組みでは、生ごみによる土壌の改良や、焚火で燃やした灰を活用しての土壌改良を行うことで、身近なものの再利用が再生産を促すことを知り、リユースの視点が子どもたちの中で持たれている様子があった。
- ・味噌づくりでは、産地の方とのやり取りや交流を通して、豆の違いに興味を持ったり、豆が味噌という違うものに可塑する様子に知的好奇心を働かせている姿が見られた。

課題

- ・すくわくプログラムの取り組みの中で、当初計画していたものから、子どもたちとの対話を通して計画に変化があり、計画通りに進めることには難しさがあり、年度当初に購入するもの等の見通しを立てることに無理があった。
- ・持続可能な社会に向けた取り組みを意識して実践に向かったが、ESD教育を子どもたちの生活に本当の意味で根付かせていくためには、一過性のイベントでは意味を持たず、日常的に保育者も意識して取り組んでいく必要があり、終わりのないプロジェクトであるため、来年度以降も継続的に取り組んでいきたい。
- ・畑の取り組みは土壌改良に時間がかかってしまい、栽培までたどりつくことが出来なかったため、来年度以降の課題としたい。